僕と夏の熱比べ

六年三組　竜田悠輝

さあ、時間だ。覚悟を決めた僕は、深い紺色の空にうっすらと黄色と桃色の柄をまとった水色の光のじゅうたんが敷かれ始めた夜明けの下へ父とドアを開けた。

ムワーっと蒸された空気が、しつこい挨拶をしてくる。

「今日は、クワガタ居るかなの、一匹ぐらい出会いたいよね。折角、新潟のおばあちゃん家まで来て早起きして頑張ってるんだからさ。」

僕は、父にそう話し掛けながら車に乗り込んだ。

昨日の太陽は、何か酷く怒っていたのか、忙しく仕事をしていたのか、我が家の車の中までも激しい熱で支配し、エアコンを温風全開の巨大ドライヤーへと変化させてもかと僕らをミイラ化しようとしてくる。出かけに着替えたばかりのTシャツの首元の色が濃くなって少し肌に張り付いているのが、バックミラーに映っていた。

日本海が木々のすき間から見える田んぼの近くの草むらに着くと、虫達の合唱が聞こえ、脇を流れる用水路には、今は少なくなった水銀灯の明かりがゆらゆらしていた。

夏の音、知らないはずの昭和の景色、あとはお目当てのワワが友だ。僕は、間もなく顔を充出しにしてくる空の太陽に向かってつぶやいてみた。

「よし、勢比べだ。世界の人々を苦しめる夏の君の仕事熱とこの時季にしか出会えない昆虫を追い求める夏の僕の情熱と、どちらの熱が熱いか勝負しよう。」

父と探し続けること約二時間、柳の木や水銀灯の周辺、その昔父が採集していた隙れ家的スポットも全て探したが、お目当てのあの黒く光る立派なハサミは、姿を見

せることはなかった。

「暑過ぎるのかな。もう三十度を超えてるわ。昔と違って、令和の虫は皇宮防衛が上手になっているのかもしれないね。」

父が、汗だくで苦笑いしながら僕に言った。そう、気付けば東の空が白み鋭い太陽の光が頭上に突き刺っていた。額から大粒の汗が流れ落ち目に入ってチクチク攻撃してくる。遠くで鳴き始めた蝉の声は、合唱というよりも何かを叫んでいるように響いた。

「悠、そろそろ帰ろうか。熊と戦いたくないしな。」

父は、いたずらっぽく笑ってそう言った。

帰りの車に乗り込むと、今朝よりも高温のサウナと化した車内には、僕の敗北を攻め立てるかのようにジリジリと太陽光線が肌を刺してきた。バックミラーには、二時間前とは全く違う色になった下シャツの僕が残念そうに映っていた。

家に着くと祖母が、朝食の準備を忙しそうにしていた。

「お帰り。虫いたかい？」

「目当てのヤツはいなかった。」

「あら、残念だったね。早起き」

たのにね。まあ虫さん達も暑くて大変なんでしょう。」と笑った祖母の顔を見て、僕にぶら下がった悔しい気持ちが少し軽くなると同時に、僕らに見つからないように草木の影で必死に涼んでいるクワガタの姿が頭に浮かんだ。自然の生き物達も、この厳しい夏の暑さを必死に乗り越えようとしている。

今日、僕の体にまとわり付いて車内も草むらも苦しいくらいの暑さで包んでいたのは、間違いなく新潟の激しい夏の熱だった。

そして、早起きして父と汗だくに

なりながらウワが夕探しをした僕の情熱も、賢く生きる令和の虫達の熱もまた、熱く燃えたぎる大きな太陽に負けないくらい真直ぐに燃え上がり高い熱を発していたに違いない。

僕は、勝負を挑んだ太陽に言った。

「勝てないかもしれないけれど、明日も明後日も負けないように頑張るよ。君の激しい情熱にね。」